



家庭と酒

中村 五六

一生の苦樂他人に因ると云はれた婦人の身に取つては良人の選擇と云ふことは實に容易ならぬ問題でありませうが是は單に婦人一生の禍福のみならず、一家子々孫々の繁榮如何にも關するのですから念を入れた上にも念を入れて撰ばねばなりません。之に就ては世間多くの婦人雜誌にも度々論せられたことで嘗ては本誌上に於ても湯淺氏之が解決を試みられたから根本問題は既に充分明かになつて居るだらうと思ふ。仍で茲には良人の副次的資格として所謂左のさくときかないとに就て所感を述べて見様と思ふ。

一、良人の活動と飲酒

『下戸の立てた倉はない』とか彼は酒も飲めぬ意氣

地なしである』とか「彼は左がさかないから話にならぬ」とか云ふことは能く上戸黨の口から出る事であるが是は何うも多少の根據を持つて居る様である。勿論吾輩は是等の言を悉く信じもしなければ賛成もしては居ないけれども斯る云ひ草の行はれる様になつたと云ふ其原因に就ては多少思ひ當る所があるのである。其は又何故かと云ふに一体酒と云ふものは從來の交際社界では欠く可からざる要具であつた。是がなくては何うも交際は兎角物足りぬ感が起る者であつた。假令理屈は何うわらうとも又一方に宴會改良黨が少しは活動もしたが改良案が消極的で寧ろ交際を沈衰せしむる爲めに未だに酒は止められない。兎に角此處五十年や百年で酒が交際社界から除かれ様とは思へない。斯様の譯であつたから從來は酒の飲めた人と云ふと交際社界にも入る事が出来た、従つて良人に活動力のあるもの腕のあるものは斯る機會を利用して榮達の途を開くとか或は交際の間に機會を

捕へて儲け口を見出すとか云ふをか出来たしするので上戸黨は何うしても萬歳であつたのだ。故に活動的有爲な材を持つた人などは實際は下戸でありながら上戸黨であるかの如く装ふ事迄もして上戸黨と交際し酒樓に迄も出入したのである。そして全くの下戸黨若しくは飲酒反對黨或は禁酒黨などは自然、社會の一遇に逐ひ遣られて餘り香ばしい事もなく過ぎ去つた譯である。併し此習慣は決して善いものではない。否今日以後の社界には假令下戸黨でも交際社界には差支なく入れる様な社交方法が成り立たなければならぬのであるから此惡習慣は假令全く根絶することは出来なくとも其弊を少くすること又は努めなければならぬと思ふ。故に従來は良人の飲酒を以て世渡りの方便として家庭に於ても大目に見る必要もあつた。即ち良人の活動する上に利用出来ると思ふことである。恐んで居つたのであるが今後の家庭には漸次斯る良人を排斥したいものと思ふ。中には隨分之を以

て男の一資格であるかの様に考へたり或は少くも自己の腕前の頼る可き所ある證據であるかの様に考へて居るものなどがあつたのは以ての外の心得違であると思ふ。

吾輩は禁酒會員でもなければ禁酒鼓吹者でもないからして今日以後の社交界から絶體的にアルコール飲料を驅逐しやうなど云ふ謀本などは決して起しては居ない。けれども是れ外に社交の道がなると云ふのは可笑しな話だと思ふ。又今日の交際社界に出入するとしては多少酒類を喉に通すと云ふことは止むを得ぬことであるから何も之を禁じて能く男の活動方面を狭くする愚を真似るものではないが去りとして此害物の勢力は成る可く壓伏して遣りたいと思ふ。要するに今日以後の男に酒を飲むことが出来ぬからして其活動に差支がある可き筈のものではないと思ふ。

二、良人は酒を飲まぬを可とす

既に飲酒癖の有無と云ふことは良人の活動力如何

に關するものにあらざるとしたらば良人としては飲酒癖のない人を撰ぶに限りませす。是には種々の理由がありませす。先づ第一に安心なのは飲酒癖の無い人は先づ其品行も方正で隠れた不潔な行や又恐ろしい不潔な病氣などを以て居るものではありません。けれども飲酒癖があれば自然悪い友達もあり花柳の巷に出入りもませせう。そして悪い病氣を持つた人などは大抵結婚後に於て之を新夫人に傳染せしむるものでありませす。之を某婦人科醫に聞いて見るのに歸人病の八十八パーセント即ち百人の病人中八十八人迄は良人の不品行から傳染したのであると云ふことです。何と恐ろしいことではありませんか。次に飲酒癖のない良人は手が掛らない。勿論妻君が最愛の良人の世話をするのでから手は如何に掛らうと決して骨惜しみなさる方ではありませんまいが、併し主人が飲酒癖があると集まる所悉く其同類で友達が遣つて來る直に酒宴が始まると云ふことでは家庭は常に煩雜を極めるもので

迎も永い間耐えられるものではなく遂には眞に良人の爲めに焼かなければならぬ世話も此爲め略す必要を生ずる様になるものです。

次に主人に飲酒癖がなければ大藏大臣としての妻君の手腕は大に振ひ易い譯である。今日中等の家庭で百圓や百五十圓の収入では主人公たるもの酒など飲んで居られるものではありません。若し之を敢えてする人があるとすれば其人は自分獨り中等の生活をして妻君や子供等には下等の生活をさせることになるに極まつて居るし然もなくば數年の後には一家借金取りの包圍中に苦めらるゝに極つて居ります。

次には子孫に害を殘さぬことです。御覽なさい不具や白痴の類の多くは皆飲酒家の家庭に多いのを結婚の最極目的は子孫の繁榮にあるものを其子孫が不具や白痴では何の樂しみがありませうか、殊に婦人は老後に子孫の立派に成人するのを見て唯一の樂とするものであるのに之が人にも見せられ

ぬ不具や、から馬鹿と来ては樂しみも何もないではありませんか以上述べた弊害は未だく小さいのです、夫れより最つと恐る可きは良人の生命其ものが危いのです大抵飲酒家の最期と云ふ者は中風か胃病で、天死するものです。天壽を終ると云ふことは極めて少ない。従つて之が妻君なるものは良人の存生中は生活難に苦しめられ其上げ句が良人への無給看護婦となり最後には未亡人となつて淋しく一生を終るようになるのが普通の順序でせう。何と恐る可きものではありませんか然るに世には判らぬ人もあるもので主人は晩酌を汲んで獨り悦に入りながら妻君や子供の前で管を巻くのを快しとして居る人がある甚だしきは妻君迄が主人と一所になつて酒を仰ぐと云ふのがある。併し是等は最早吾輩の議論の外で何とも申し様のないものである。斯る家庭に生れ斯る有様を目撃して育てられては眞面目な有爲なものには逆も仕上るものではありません

飲んで害なき酒量

衛生上用めて妨げのないだけの分量は、何程であるかといふに、甚だ定め難いものである、茲に全く適當な説とは信じられないが、近來瑞西の醫師で研究の上之を定めたものによると、酒精のまゝで一日に五十乃至六十瓦までは飲んで、差支ない事になつてゐる、此説に隨ふ時は、歐洲の麥酒は一日に一リツトル半即ち凡そ九合までば飲んで害のない事となる、又葡萄酒は一日に六百瓦即ち三合までは差支なく、日本酒は一日に一合五勺ばかりは可い割合である、思ふに是は略適當な分量であらう、從來の實驗によつても、一日に一合内外の獨酌を爲す者には、格別害を受ける者も少ない様である。

日本酒は、酒精の含量は適度であるけれども、其飲み方は好まじき習慣でない、宴會の席上で獻酬をしたり、又其時間が大層長きに互つたり、又客に強ひ侷めて酌配せしむるのを、主人の務めと心得てゐる、是は各杯にして、各自が隨意に飲む方が宜からう、斯くしたならば、時間の費えをも省き口中の病毒を傳染する虞も防ぐことできる。